



試し読み版

ホカヅラノムコウ

喜多隆斗

目次

第一章 事故	
一	2
二	9
三	15

第一章 事故

満天の星空を流星がさっとかすめて消えた。鏡国彦は視界の隅に流星を認めたが、願い事を唱える必要なかった。すぐとなりでは山城久美、通称愛子が愛くるしい寝顔を見せていた。この寝顔さえあれば、他には何もいらぬ。愛子さえいれば。

霧の中から突如現れたガードレールに驚き、国彦は運転していたクラウンのハンドルを慌てて切った。横から愛子の、迷惑そうなうめき声が聞こえ、そこで国彦の切ない妄想は完全に断ち切られた。

愛子が横で寝息を立てているのは事実であったが、実際は辺り一面霧に覆われ、満天の星空も流星も見えなかった。人生は思い通りにならないものだ。国彦はため息をついた。

もし、流星に願をかけるなら願いはただひとつ。

愛子を自分のものにしたい。

しかしそれが叶わぬ夢であることは分っていた。国彦の手はひとりでポケットに伸び、キーホルダー代わりの古びたカラビナをそっとなでた。

カラビナは二十年前に白血病で死んだ父親、匠の形見であった。国彦が生まれた時に匠はすでに他界していた。カラビナは父親の部屋を覗いた時に、引き出しから見つけたものだった。何度か使用したらしく、古びて傷だらけだった。母親はカラビナを見る度に悲しそうな目をしたが、その傷の一本一本が国彦には何故か父親との絆のような気がして、どうしても手放せなかった。

国彦はそのカラビナを一度握りしめてから、ポケットから手を引き抜き「無理だよな」

とひとりごちた。

国彦の運転するクラウンは峠道を、ゆっくりと、若干おぼつかない足取りで下っていった。

鏡国彦は東京のあまり有名でない大学に席を置く、弱冠二十歳の大学生だ。風貌は見るからに冴えない。細面で目は小さく、背はあまり高くない。眼鏡でも掛ければガリ勉に見えなくもない。十年前でも流行らないような胸にワンポイントついたトレーナーと、年季が入ったと言うよりも、単に薄汚れただけのジーンズをいつも着ていた。勉強は駄目な訳ではないが、あまり熱心にやっていた。運動はまるで駄目だ。国彦は他人からあまり注目を浴びるような存在ではなかった。

国彦に唯一熱心な所があるとしたら、それは夜空を眺めることだった。小さいころから星を眺めるのが好きだった。図書館に行っても星の写真ばかりを眺めていた。そんなある日、一冊の本に出会った。アメリカの天文学者が書いた本で、宇宙には知的生命体

が住む惑星が必ず存在する、といったことが科学的なデータを元に綿々とつづられていた。

その本には、現在地球のように恒星の周りを回る惑星は百以上発見されている。その大半は木星のような大型の惑星であるが、数十年以内に必ず地球と同じ大きさの惑星が発見されるだろう、そしてその惑星のいくつかには、必ず生命の痕跡を見つけることができるだろう。と記されていた。

国彦はこの本に没頭した。数十年という期間を考えると、自分が生きている間に地球外生命体が発見されるかもしれない。もしかしたら、遭遇する場面を目にすることができるかもしれない。そう考えると興奮で息が詰まりそうだった。国彦は自分もそのプロジェクトの一端を担っていたと思うようになった。将来は天文学者以外にはあり得ない。自分は必ず天文学者になるんだと心に決めた。

だが、受験で失敗した。

結局、国彦がたどり着いたのは三流大学の天文部だった。

この天文部は、有象無象のあつまる得体の知れない集団だった。実際部員の数を正確に知る者は一人としていなかった。夜となれば星を見ると称して酒盛りをし、警察に通報されることもしばしばであった。誰もが自分は酒豪だと称して、一升瓶を振り回し、酔いつぶれて吐いていた。

そんな中であって、いつも笑顔を絶やさない女性がいた。それが山城久美だった。

山城久美は小柄でいつも髪をポニーテールにしていた。そしてたいして面白くもない親父ギャクにも笑顔で応え、きつい冗談は豪快に笑い飛ばした。

要するにいつも笑っている。

部員たちはそんな愛嬌のある笑顔を称して、愛子と呼んでいた。決して美人ではなかったが、そんな愛嬌のある笑顔と、瑞々しくありながら不思議と熟れた女の色香も漂わせる愛子を、天文部の誰もが狙っていた。

だが、愛子の心中に座しているのが誰なのかを、誰もが知っていた。

国彦もまた。

「儂い夢か」

国彦はハンドルを握ったまま呟いた。

山間の道からは星がよく見えた。カーオーディオからは静かな音楽が流れ、ムードを盛り上げていた。シートに身を任せている愛子の、短めのスカートから伸びた脚が暗がりにも白く浮かび上がっていた。カーオーディオの僅かな採光が、流行りのルージュに反射し、唇の肉感を伝えてくる。

そっとバックミラーに目をやる。この車の持ち主、というよりも借り主である安曇信は、バックシートでこれ以上ない仏頂面をしている。つまり眠りこけているということだ。

チャンスは今しかない。車を脇に寄せ、そっとキスをするだけでいい。もしキスしても目を覚まさないようなら、形のいい胸にそっと触れてもいいかもしれない。国彦は身体が熱くなるのを感じた。そして車を止められそうな空間がないか目を光らせた。

あった。

数十メートル先にすれ違いのための待避エリアが設けてある。あそこしかない。みる

みる待避エリアが近づいてくる。あとはブレーキを踏むだけだ。

ところが国彦はブレーキを踏むことなく、そのままのスピードでクラウンを通過させてしまった。

「やっぱり無理だよな」

国彦は強引に唇を奪うこともできない自分を笑った。

午前二時二十八分。むなしさだけが残った。

ことの発端は愛子の何気ない一言だった。

「磐梯山の裏に UFO が墜落したんだって」

「U F O ? 』」

天文部の誰かが聞き返した。

「知らないの？ 未確認飛行物体の略語よ」

「お前、俺をバカにしてるだろ」

「へへへ。なんでわかったの？」

「それよっかさ、みんなで探しに行かないか。その落ちた UFO」

「いいね。愛子ちゃんも当然行くよね」

「そうねえ。どうしようかしら」

こんなやりとりが天文部ではしょっちゅう交わされていた。そして国彦はそんなやりとりをいつも隅で聞いていた。

いつもならば聞き耳を立てるだけの国彦だったが、UFO という言葉に釣られ、つい口を挟んでしまった。

「ねえ、俺も行っていいかな」

国彦の言葉は誰かの豪快な笑いかき消された。愛子が国彦をちらりと見た以外、誰も国彦を注目する者はいない。その愛子もすぐに会話に戻ってしまい、今や国彦は輪の中にいながら、完全な孤立状態だった。

国彦は後悔した。何故今回に限って口を挟んだりしたのだろうか。こうなることは分かっていたのに。いつもそうだ。国彦はいつでも軽視されていた。国彦の席が足りないこともあれば、何かの順番が国彦だけ忘れられたまま、イベントが終了されてしまうこともよくあった。

確かに国彦は野暮ったい格好をしていたし、これと言った特技もない。強いて言えばけん玉が人より上手いくらいだ。それに国彦自身あまり人に注目されるのは好きではない。でも時々切なくなった。

「そういえば今日はバイトだったっけ」

国彦は誰も聞いていない言い訳をすると、鞆を肩に掛けて天文部の部室を後にした。扉を閉めた直後に中から一斉に笑い声が上がった。もちろん誰かが冗談を言ったのであって、自分が笑われたのではないことは分かっていた。それでもバカにされているという気持が残った。よほど扉を蹴破り「貴様らに何がわかる」と怒鳴ってやりたかった。

だが国彦は自分がそんなバカな真似はしないことが分かっていた。そんなことをすれば、余計に笑いの種だ。国彦は時計を見ると空き時間をどう潰すか思案し、結局コン

ピュートルームで数学の宿題でも解くことにした。

二十畳ほどの広さのあるコンピュータールームは、本来天体望遠鏡の制御のためのコンピューターが置かれた部屋である。しかし普段天体望遠鏡は使用されていないし、予算に任せて購入した高機能のコンピューターが数台余っていた。そこで学生にも許可制で解放されていた。

コンピュータールームの電子ロックされた扉を抜けると、中には誰もいなかった。この大学にはあまり熱心な学生がいないのである。国彦は驚きもせず、一番手前のコンピューターの前に座った。そしてコンピューターの自分の作業環境を開こうとして、手を止めた。すでに誰かの環境が画面上に開かれていて、そのままになっていた。誰かが終了手続きをとらないまま、ほったらかしにして帰ってしまったのだ。

国彦は受付に知らせようとして、そういえば使用者名簿に記名したとき、前の使用者が愛子であったことを思い出した。その愛子は今部屋で馬鹿笑いをしている。

環境内のファイル一覧を表示させると、科目ごとのファイルがいくつも表示された。例しに数学の今日の日付のファイルを開いてみた。

ビンゴ。

それは、これから国彦がコンピューターに計算させようとしていた、数学の宿題そのものだった。しかもご丁寧に一番上に愛子の名前まで入っている。疑いようもない。国彦はさっき自分を笑った報いだ、と身勝手に思いながら全てのファイルを自分の環境にコピーした。

コピーしたファイルを一つ一つ見ていると、一つだけ宿題とは関係ないファイルが混じっていた。何かの実行ファイルらしかった。

国彦は特に考えもせず、実行ファイルを実行してみた。

すると、今国彦が見ているウィンドウとは別のウィンドウがディスプレイ上に開き、何かの処理コマンドを次々に実行していった。表示からすると、どこか別のコンピューターに接続しているようだった。接続が完了したと同時に、次の様なメッセージが出力された。

Welcom to New Tron 2000

「なんだこりゃ」

NewTron2000 というのは、学部が無駄遣いだと批判を浴びながら購入したスーパーコンピューターであった。NewTron2000 は一秒間に一千億回もの演算処理が可能だが、残念ながらそんな性能があったところで、たいがいの研究室はハイスペックなパソコンが一台あれば済むような研究しかしていなかった。そんなスーパーコンピューターに、愛子は一体どんな用があるというのか。

画面では次々に何かの計算を実施している。やがて一分ほどで計算が終了し、新たにウィンドウが一枚表示された。ウィンドウ内では再び別のコンピューターに接続を試みていた。そして接続が完了すると、ログイン画面が表示され、ログイン名とパスワードが自動で入力された。

国彦は背中を冷や汗が流れるのを感じた。今日の前で行われていることは、もしかし

てハッキングという犯罪なのではないか。NewTron2000 が計算していたのは、このパスワードなのではないか、という気がしてならなかった。

そしてログインが完了すると、再び自動でコマンドが入力され、何かの処理を勝手に始めた。

やがて一枚のウィンドウが開きタイトルが表示された。

福島国際空港管制システム

国彦は慌ててコンピューターの主電源を切った。切なげな電気音をたてながらコンピュータが停止した。停止する直前に国彦が目にしたのは、嘘の表示でないならば福島国際空港のレーダー画面である。空港を中心とした円の中で、3文字のアルファベットで現される航空機らしき光点が移動していた。

「ゲームだよな。これはゲームだ。バカだなあ愛子は。学校のコンピューターでゲームするなんて。通信ログも実行ログも全部保存されてるんだから、誰がやったかすぐばれるにう決まってるじゃないか」

「ゲームじゃないわ。本物よ」

国彦は小さな悲鳴を上げた。振り向くと愛子がいつもの笑顔で立っていた。

「びっくりさせるなよ」

愛子は国彦の横に座った。

「宿題コピーしだでしょ」

「えっ」

背中からどっと汗が噴き出した。

「してないよ」

「じゃあ、この画面はなに？ それとも他人の環境で勝手に作業をしていたの？」

いつの間にか愛子の顔から笑顔が消えていた。笑っていない愛子ってこんな顔をしていたのだろうか、と国彦は思った。男を飲み込んでしまいそうな顔。

「あれは、偶然動いてしまったんだ。そう偶然」

愛子がじっと見返す。

「国彦。あなた今窮地に立っているのよ。分かる？」

「窮地ってどういうこと」

愛子の顔に笑顔が戻ってきた。しかしどこかその笑顔は国彦を不安にさせた。

「ねえ、今夜予定ある？ そういえばバイトって言っていたっけ」

「えっ？ あっ？ あれは、間違い」

嘘という言葉が出かかったが、かろうじて押しとどめた。

「じゃあ、暇よね。ドライブしようよ」

国彦は展開についていけなくなった。窮地とドライブとどう関係するのか。

「二人でさ」

国彦の背中を再び汗がどっと流れた。今度は冷や汗ではない。思いがけない申し出にどぎまぎしてしまったのだ。愛子がさらに目をのぞき込んできた。愛子のほのかな香水の香りが鼻をくすぐった。顔が火照り、頭がくらくらしてまともな判断ができなかった。

「えっ。えっ。いいけど」

「決まりね。夕方に国彦のアパートに行くね」

愛子は有無を言わせぬ笑顔を国彦に向けると、さっと席を立ち出口に向った。国彦は火照った顔を向けるのが精一杯だった。

「ああ、そうそう。窮地の意味はね」

愛子がガラスの自動扉を開きながら振り向いて言った。

「私は履歴を消してくれる便利なツールを持っているけど、あなたは持っていないってこと。わかる？」

愛子の手に外部接続メモリーが握られていた。中にその便利なツールとやらが保存されているのだろう。

「だからすっぱかしたりしないでね」

クロームガラスの扉が閉まり、愛子のシルエットが遠離っていった。

「履歴を消すツール？」

はたと気が付いた。愛子はハッキングをした後に、かならずツールを使って履歴を消していたのだ。だから学校から平気であるようなことができるのだ。ところが立った今国彦がやったことは、学校のコンピューターの履歴、福島国際空港のコンピューターの履歴のどちらにも残っている。本気で調べればすぐに誰がやったか足がつく。あとはコンピューターを管理している人間が、どれくらいの頻度で履歴をチェックするかにかかっていた。

「ちょっ。ちょっとまってくれ。愛子」

コンピュータールームを出て愛子の後を追ったが、愛子はすでにどこにもいなかった。

「愛子。お前一体何者なんだ」

帰りの道々国彦は考えた。愛子とドライブなんて夢のようである。しかし、一体理由は何なのか。あんなことの後だ。ただのドライブと思えない。

それになぜ自分なのか。いままで国彦は愛子から、同じクラブの仲間以上の扱いを受けたことは無かった。はっきり言ってしまえば、愛子が国彦をドライブに誘う理由など何もなかった。

それでもいい。愛子と二人きりになれるのであれば。

しかし愛子と二人きりになるには、国彦は重大な課題をクリアしなければならなかった。国彦は車を持っていなかった。仕送りとバイトで食いつないでいる国彦の財布には、いつでもなげなしの金しか入っていなかった。

チャンスなのに。

国彦は自分の不甲斐なさにため息しか出なかった。そして次の瞬間にはもう、どうやって愛子に言い繕おうかと考え始めていた。

そんな国彦の苦境を救ったのは、数少ない友人の安曇信であった。

アパートに帰ってすぐ、部屋を乱暴に叩く者があった。隣の住人が間違えそうな程の音でドアを叩くのは、安曇以外にいなかった。

「おい、この薄っぺらなドアを開けろ。怠け者」

言うが早い、安曇は勝手に部屋に侵入してきて国彦の前にでんと座った。

安曇という男は実に変わった男であった。下駄のような四角四面の顔を持ち、いつでも白衣に袴という格好を貫き、足許白足袋にはわらじである。安曇は国彦の高校時代の友人であったが、大学には進学せず、かといって就職するでもなく、修行をするといって修験道の寺にしばらく籠もってしまった。これに対し、安曇の両親は別段驚くでなく、一年二年道楽するのも人生の勉強だと言って、気にも留めなかった。これをいいことに、安曇は修行に明け暮れた。性が合ったのか、素質があったのか、安曇はすっかり修験の道にはまりこんでいた。四六時中修行をしているので、格好も修験者の修行の格好そのままという訳だ。

「おい、国彦。運転させてやるからドライブに行こう」

「ドライブ？」

天の助けにも似た申し出に、飛び上がりたい気持であったが、同時にうち消せない疑問がわき上がってきた。

「なんだその不審そうな顔つきは」

不審な顔つきにもなる。安曇は修行に明け暮れていたため、未だに運転免許というものを持っていない。

「ははん。さては俺のような人間は車を持っていないと考えているな。浅はかな。表を見て見ろ」

車以前の問題だと思いながら窓の外を見ると、前の路地にクラウンが道幅一杯を使って停めてあった。いやむしろ乗り捨ててあると言ったほうが正しい。

「お前、あの車どうしたんだよ。高級車じゃないか。盗んだのか？」

「なんだその言いぐさは。俺は人を脅すことはあっても、物は盗まない。それよりも、せっかく高級車を運転させてやると言っているんだ。行くのか行かないのか、どっちなんだ」

運転させてやると口では言っているが、要は免許がないのだ。ここまで自力で運転してきたこと自体奇跡に近い。

それにしても愛子のこともある。国彦は少しばかり思案してから

「行くよ」

と答えた。

「ただちょっと条件があるんだ」

「条件？」

安曇の鼻の穴が大きくふくらんだ。何か口汚い言葉を吐こうとしている前兆だ。

「友達の女の子と一緒に乗せて欲しいんだ」

安曇の開きかけた口が閉じた。

「女？」

国彦が見ると、愛子が不安そうな視線を送ってきた。安曇に対して気後れしているに違いなかった。それもそのはず、見慣れぬ白衣の男がでんと後部座席に陣取っているのである。友人でなければ国彦だって警戒する。

生まれてこのかた人見知りなどしたことがないのか、安曇はなれなれしく愛子に話しかけていた。

「このような軟体生物と一緒にでは心細いでしょう。私がお供いたしましょう」

愛子は何か言いたげな視線を国彦に送ったが、自動車の持ち主が安曇なのでどうしようもない。愛子は少々ひきつった笑みを見せながら助手席に身を収めた。

「磐梯山に向ってくれる」

「磐梯山って猪苗代の？」

「そう、猪苗代の」

「ちょっと待って。俺そんなに金もってないよ」

すると唐突に安曇が顔を突きだして言った。

「わはは。安心しろ。無知くんは知らないだろうが、この車は高速料金も払ってくれる優れものなのだ」

見ればETCのカードが挿さったままである。引き抜いてみると当然安曇の名義ではない。一体誰のカードなのか分からないが、愛子とのドライブを続けるためには目を瞑る以外に手はない。国彦はカードを戻し、ため息を一つつくど高速道路の入口に向った。

しばらくの間、安曇が一人修行の話やら、住職の悪口やらを喋っていた。愛子はいつものように笑顔で相槌を打っているが、どこか上の空というふう国彦には見えた。

「愛子ちゃん。修験道の寺というのはね日本全国に点在しているんですよ。そしてそれぞれの寺を結ぶ山道があるのです。一般の人々が歩かないような険しい道です。この道を辿り、修行を積む。そして寺においてまた修行を積む。一年中修行です。休む間もない。この男のように一年中日曜日みたいな奴とは訳が違う」

「ちゃんと大学いっているよ。どこが日曜日だ」

「それに私は霊力も優れているし、体力もある。私の母山である安達太良山から磐梯山までならひとつ飛びです。半日もかからない」

すると今までただ相槌を打つだけだった愛子が急に身乗り出してきた。今の安曇の話のどこに、愛子の気を引く要素があったのか、国彦にはまったく見当もつかなかった。

「安曇さん磐梯山付近はお詳しいんですか」

「そりゃあもう。庭みたいなものです。磐梯朝日から出羽三山に至っては修験のメッカで

す。修験銀座とも言われているくらいで。それらの寺の住職はみな私の弟子みたいなものです」

「いつからそんなに偉くなったんだよ。まだ修行中の身だろうに。それにメッカはイスラム教の聖地だろ」

「いちいちうるさい男だな。車から放り出すぞ」

放り出したら誰が運転するんだと国彦が反論しようとする、それを愛子が遮った。なんかやはりいつもの愛子とは違う。国彦の脳裡にコンピュータールームの一件がよぎった。

「じゃあ、安曇さんはあの地方の歴史や民族伝承なんかにも精通してらっしゃるのね」

「当然。磐梯山とえば二百年ほど前の噴火ですね。その噴火によって五色沼や檜原湖が造られた。一部の伝承によれば、この噴火は鬼の仕業といわれています」

「鬼ですか」

「そう。鬼です。でも地獄にいるあれとはちょっと違う。その鬼は月から白い雲にのってやって来たと言われてます」

「まるでかぐや姫ですね」

「そう。似ていますね。あの辺りではかぐや姫に似たような民話がたくさんのおこされています。例えば……」

安曇はここぞとばかりに自慢の知識を披露し始めたが、悦に入っている安曇をよそに、愛子はもう聞いておらず、何か考え事をしているようだった。

猪苗代のインターを降りたのは、既に夜の十時過ぎだった。猪苗代湖近辺は夕刻から急激に気温が低下したせいで、薄ぼんやりとした霧が辺り一面に漂い、まるで常世に踏み込んでしまったかのような雰囲気であった。さすがに喋り疲れたのか、後部座席では安曇が仏頂面で眠っていた。

愛子は安曇が眠ったところから、助手席でノートパソコンを開き、しきりに何かを打ち込んでいた。

「ちょっと停めて」

どうしたのかと思い国彦が停車させると、愛子は慌てて車を飛び降りた。愛子は霧をかき分けながら、霧の立ちこめる林に消えた。

「愛子ちゃん」

心なしか、国彦の声は小さくなっていた。すると林の奥で、愛子が嘔吐する音が聞こえてきた。酔ったようである。

「車内でパソコンなんか使うからだよ。大丈夫かい」

戻ってきた愛子はすっかり青ざめていた。

「大丈夫」

それでも笑顔だけはいつもの愛子であった。

「それよりこれからどうするのさ。もう磐梯山の麓だよ」

「猪苗代スキー場の脇から山頂に向う林道が伸びているの。そこへ向って。小一時間で小さな祠の前に出るわ」

「祠って、こんな霧の日にそこで何をするつもりさ。気味が悪いよ」

言いつつも国彦は車内で眠りこける安曇をちらりと見て、下心がむくむくと頭をもた

げた。

「いいから。さあ、行こう」

愛子が完璧な笑顔に向けた。とても吐いた直後と思えない。何にしても国彦に逆らえる訳がなかった。

国彦がドアを閉めようとする、霧の中で何かがざっと動いたように思えた。その方向に目を凝らしてみたが、暗いし、霧も深いので何も見えなかった。国彦は助手席で待っている愛子を見て、何も考えずにクラウンを発進させることにした。

細く見通しの悪い道をしばらく走ると、唐突に視界が開けた。道路が切り立った崖の上を走っているのだ。霧さえなければ眼下には猪苗代の夜景が見渡せるのだろうが、今は乳白色の湿った空気が広がるばかりだ。少し先になんとか車を回転させられる広さをもった空き地が見えた。

空き地に乗り入るとライトが本当に小さな祠を照らし出した。お稲荷さんらしい。

祠を見た愛子の顔からざっと血の気が引いていった。

「どうしたの？」

愛子は返事もせずに車を飛び降りた。

祠はめっちゃめっちゃに荒らされていた。

地元の若者が悪ふざけでもしたのだろうか。それにしたって愛子が血相変えて飛び出す理由は何なのか。国彦は愛子に声をかけようと、そばまで行ってその理由を理解した。祠の周辺にビデオカメラらしき機材が散乱していた。愛子はこの祠にビデオカメラを仕掛け、何かを録画しようとしていたのだ。

「ひどいな。ビデオ高かったんだろうに」

「別にビデオはどうでもいいの。どうせもらい物だし」

ビデオカメラを調べていた愛子はそう言うと国彦に笑顔を見せ、しゃがんで破壊されたビデオカメラから強引にビデオテープを取り出した。そして大事そうに握りしめた。

「何が映っているのか、聞いてもいいかな」

ビデオカメラは一般に販売されているハンディタイプのものである。天体観測をするには役不足だ。

「夜の磐梯山」

「ビデオカメラで山を撮影していたのかい？ このビデオカメラで映ると思えないけど」

「もしかしたら未確認の飛行物体とか映るかもしれないじゃない。それにこれを壊した犯人もきっと映っているわ」

愛子は車から新しいビデオカメラを取り出すとテープをセットした。

「もう一台ビデオカメラを持っていたのか。驚いたな」

「これももらい物なの」

愛子は舌を出していたずらっぽく笑った。

国彦は愛子のことがますます分からなくなってきた。

二人でビデオカメラの画像を最後まで早送りで見してみた。未確認の飛行物体は映って

いなかった。だがビデオカメラには恐ろしい映像が録画されていた。ビデオカメラを壊した犯人が黒いシルエットで撮影されていたのだ。

ビデオカメラが破壊される数分前から、祠の周りをがさごそと動き回る物音がした。しばらく動き回る音が続いたかと思うと、唐突に爆発のような音がして祠の扉が吹き飛んだ。そしてビデオカメラの前にぬっと黒い影が映し出された。ビデオカメラを破壊した犯人である。明りがまったくないので、暗い背景の中で、真っ黒な犯人の影がゆらゆらとうごめいているのが確認できるだけだった。犯人はしばらくビデオカメラの前で、背伸びしたり、下を覗いてみたりしていた。ビデオカメラという物を理解していないような動きだ。そして犯人は耳障りな、とても人間のそれとは思えない奇声を発すると、まるで気でも狂っているかのように、横様に腕を振り回してビデオを三脚ごとなぎ倒したのだ。ビデオカメラは衝撃で宙を舞い、地面に落下して完全に破壊された。時間にすればほんの数分であったが、国彦たちに犯人を印象づけるには十分だった。

国彦はこの映像に言いようのない恐怖感を覚えた。

「酷い奴がいるもんだな。きっと地元の若者かなにかだよ」

国彦は自らの恐怖感を打ち消すように言った。こんなビデオを見れば、きっと愛子も同様な気持だろうと思いき愛子にも気を遣ったつもりだったが、愛子は

「本当に若者のいたずらかしら」

と答えた。

「やめてくれよ。気味が悪い」

「ビデオの映像はほんの二三時間前のものよ。もしかしたら、まだ近くにいるかも知れないわね」

愛子はそういつたはずらな笑みを見せた。

するとどこか遠くから獣の鳴き声が響き渡り、鳥たちが飛び立つ音がした。

「冗談じゃないよ。こんな物騒な所からは早く帰ろうよ」

「そうね」

愛子は新しいビデオカメラを祠にセットし直すと、破壊された扉を立てかけて乳白色の闇に黒々とそびえているであろう磐梯山の頂きの方を見上げた。国彦にはその見上げる目が、恐ろしいものを見てしまった目ではなく、何かを決意し直した目に見えた。

愛子が見上げたちょうどその方向で、二つの目がじっと国彦たちを見つめていた。もし霧がなければ、愛子の視線とぶつかったかもしれない。その目の持ち主は国彦たちが立ち去るまでじっと目で追い続けていたが、やがて遙か先で乱暴に、狂ったように木々なぎ倒す音を聞きつけると、静かに木々の間を縫い霧の中に消えていった。

助手席の愛子はいつの間にか眠っていた。

そんな愛子の脚を、国彦は盗み見ながら峠道を運転していた。そしてよそ見があたり、危うくガードレールに車をこすりそうになり、慌ててハンドルを切った。借り物の車をこすったりしたら大変だ。とても学生に弁償できる代物ではない。

「欲望を丸出しにして生きているからそういうことになるのだ」

「うわっ」

国彦は眠っていると持っていた安曇の、突然の言葉に驚いて再び急ハンドルを切った。

「危ないじゃないか」

「危ないのは欲望にまみれたお前の心だ」

「何訳の分からないこと言っているんだよ」

「それより腹が減ったな」

嫌な予感がした。安曇が飯の話をするときは、大抵タダ飯にありつこうと考えている時だ。

「知っているぞ。さっき愛子ちゃんの胸をじろじろ見ていただろう。そのことをばらされなくなかったら、飯をおごれ」

思ったとおりだった。それにしただって見ていたのは脚で胸じゃない、と反論したが、口げんかで安曇に勝った例しはない。こういう時は話を逸らすのが一番の策だ。

「それより、お前。この車一体どうしたんだよ」

「ふん。俺くらいになると車の一台や二台朝飯前なのだ」

全く意味が分からない。それでも飯の話に戻っては困る。

「寺で借りたのかい」

「あの貧乏住職がこんな車持っている訳がない。あそこには未熟な修験者が沢山くるから、そいつの霊力を高めてやるために没収したのだ。そもそも自然と一体となる修験者が、車なんか乗ってはいけないのだ」

要するに力の弱い者からかすめ取ってきたらしい。まるで恐喝だ。それに自分のことを棚に上げている。全く持って身勝手な男だ。修験者というのはこういう男ばかりなのだろうかと思彦は思った。

「街まではどれくらいだ」

「知らないよ。一時間くらいだろう」

「何？ そんなにあるのか。なんとかしろ」

何とかしろと言われたって国彦にはどうしようもない。国彦が黙っているとさすがに安曇も諦めたのか、鼻を鳴らすと再び目を瞑ってしまった。そして五分もしないうちに高いびきを始めた。

「眠ったか」

国彦は胸をなで下ろした。寝た子は起こすなだ。

前を向いた国彦を、眠ったはずの安曇が薄目を開けて見つめていた。その視線はどこか探っているようでもあり、警戒の光を帯びているようでもあった。そんなことが国彦にわかるはずもなかった。

その目とは少し違った目が、国彦の運転するクラウンを木々の間から見つめていた。小さな無数の目は、クラウンが来るのが前もって知っていたかのように待ちかまえ、通り過ぎて見えなくなるまでずっと見つめていた。

国彦はボリュームを少し下げようとオーディオに手を伸ばした。指がスイッチに触れたかという時、唐突にそれはやって来た。

まただ。

身体全体が神経にくるまれた心臓になったような気分。全身の感覚が鋭敏になり鼓動の度に血液に押し流されてしまうような感覚。そしていつも見る幻覚。周りの景色は全て消え去り、真っ暗な空間に国彦はただ一人浮いている。正面には丸い光。真っ白でま

ん丸な、まるで月のような、何かを期待させる光が国彦を照らしている。

あの光の中には何があるのか。

国彦はいつもそう思う。その答を知っているような気がするのだが、決してそれが何だかわからなかった。

そしてそれはいつも唐突に終わる。

「気を付けろ」

安曇の声で我に返るとヘッドライトが何かを照らし出していた。

ライトが照らし出したのは人影だった。

三

何者かが霧夜に峠の真ん中に立って、迫り来る車を避けようともせずはこちらを見ていた。

「ぶつかる」

アドレナリンが流出し国彦は身体がかっと熱くなった。ブレーキを踏む暇はなかった。ぶつかった、と思った瞬間、その人影は知的な目で国彦をひととき見つめてから、信じられない素早さで飛び退いた。

助かったと思ったが、次の瞬間ヘッドライトが照らしている物を見て、国彦は血の気が引いた。ガードレールが猛烈な勢いで迫って来た。国彦の頭の中を猛烈な勢いで過去の映像が通り過ぎていった。終わりだと思った。

それでも身体が勝手に反応し、国彦はハンドルを切った。タイヤが悲鳴をあげた。ボディがガードレールをこすり、金属と金属のこすれる耳障りな音がした。そしてクラウンはぎりぎりの所で向きを変えると、今度は山側の壁に突進した。そしてクラウンは壁に激突した。

何かが爆発するような音がして、国彦の目の前が真っ白になった。そしてショックがきて、首が軋んだ。息ができなかった。エアバッグだと気が付くまで数秒かかった。

「いててて」

「おい、愛子ちゃんの様子をみてやれ」

国彦の返答を待たず、安曇は車を飛び出した。そして獣のような素早さで道路を渡ると、ガードレールをさっと飛び越え、谷に向かって身を躍らせた。

「おい」

と国彦が声を発した時、すでに辺りは乳白色の闇が広がるばかりだった。

「どうなってるの」

愛子が半ば不機嫌で、半ば驚いた様子で訊いてきた。国彦は気が動転してしまって、何と答えればよいかも思いつかなかった。何とか状況を伝えようと四苦八苦した末、ようやく、

「怪我はない？」

とだけ言った。

国彦たちは数分かかって外へ出た。国彦はまだ気が動転していたが、冷えた空気が急速に頭を冷やしていった。シートベルトとエアバッグのお陰で、二人とも怪我はなかった。それが幸いし、気持がかなり楽になった。

さて問題は車だ。ボンネットから白い煙がもうもうと立ちのぼっていた。えらいことだと思った。国彦は再び冷静さを失い気が遠くなりそうになった。見るも無惨。前部は

ひしゃげて潰れ、ボンネットがくの字にまがっていた。白い煙はラジエーターの湯気らしく、火が点いたりする様子はないようだ。どうすればよいのだ。国彦は助けを求め廻りを見回した。正に峠道のまっただ中。何も無い。

愛子はすでにすっかり冷静さを取り戻していた。慌てる国彦をよそに、携帯電話を取り出した。

「圏外だわ」

「どうしよう」

国彦は煙を噴くボンネットを上から覗き込んだり、下から覗いてみたりしたが、どうしてよいか全くわからなかった。さらに霧は濃くなるばかりだし、先程のビデオの内容も思い出され、峠の真ん中で立ち往生するのはまるで生け贄にでもなったみたいで、泣きたい気持だった。

「待つしかなさそう」

「ああ、もうだめだ」

何が駄目なのかわからなかったが、国彦は思わずそう呟いた。そんな国彦に愛子が笑顔を向けてきた。

「心配ないわよ」

「だって、ビデオの犯人がうろついているかもしれないよ。それに気味の悪い鳴き声も聞こえるし」

「祠から結構降りたし、簡単にここまでは来られないわ。鳴き声だって鳥か猿かなにかでしょう。それにしても、夜の峠が怖いなんて、あなた本当に天文部員なの？」

国彦は愛子の冷静さに、すっかり肝を潰してしまっている自分が恥ずかしくなった。

「愛子ちゃんて強いんだね」

愛子は僅かに心外という顔つきをしたが、

「慣れてるの」

と言った。

「慣れてるって事故に？」

愛子はぶっと吹き出した。

「事故に慣れてるんじゃないわ。ただ」

一旦言葉を切り、愛子は少し考えてからぽつりと言った。

「こういうことに」

国彦はなんとなくそれ以上この話題を続ける気になれず、車を調べ始めた。運転席はエアバッグが邪魔しているが、後部座席は全くの無傷だ。こんな霧の中に突っ立っているよりも、エンジンを切って後部座席に入っていたほうがよさそうだ。

「後は大丈夫だから、車に乗っていきましょうか。少し冷えてきたし」

「そうね」

二人で後部座席に収まると、国彦は鼓動が早まっていくのを感じた。暗がりの中で二人きりなのだ。霧が音を吸収してしまうのか、物音一つない。自分の鼓動が聞き取れそうな気がした。喉がごくりとなり、国彦はぎくりとした。

これからどう会話を続けていこう。思案したが、国彦の心に浮ぶのはコンピューター

ルームでの一件だ。そんなことを言い出せば、せっかくの雰囲気は台無しだ。国彦が頭を悩ませていると車内がぱっと明るくなった。愛子がライター煙草に火を点けていた。

「愛子ちゃん煙草吸うの？」

「いけない？」

愛子がからかうように訊いてきた。

「別に。ただちょっと驚いた。そういう風に見えないから」

愛子はふふふと笑うと

「学校じゃだいぶ猫かぶってるからね。でも時々吸いたくなるんだ。そう、今みたいな窮地に追い込まれると」

「窮地か」

国彦はひどく責められている様な気がした。

「国彦も一本吸う？」

「うん」

国彦は煙草に火を点けて貰うと、大きく吸い込んだ。頭がくらくらとして猛烈に咳き込んだ。煙草は吸ったことがなかった。よこで愛子がけらけらと笑っていた。その笑いには何の陰りもなかった。国彦はすっところどころが軽くなった気がした。

「ねえ」

「なに」

「国彦って好きな人とかいるの？」

唐突な質問に国彦は一瞬どぎまぎした。なぜそんなことを聞くのだろうと思ったが、暗いせいか、

「いるよ」

と驚くほどすんなりと答えていた。

「誰よ。教えて」

君だよと言ってしまおうか。でもやっぱり言えそうもなかった。

「ちょっと言えないよ」

「ふーん。国彦の好きな人ってどんな人なんだろう」

国彦は愛子のことを聞きかけて、慌てて口をつぐんだ。そんなこと聞かなくても分かっていた。本人の口から言われたら、ますます傷つくに決まっていた。

「その人とは付き合ったりしてるの」

「してないよ。片思い。俺みたいなのが女の子とつき合えるわけないよ」

「そうかな。国彦だってまんざらじゃないよ」

愛子はそう言うと、国彦の手にやさしく触れた。愛子の手は温かかった。

国彦はめまいがしそうだった。チャンスは今しかない。これを逃したら、二度とこんなチャンスには巡り会えない。愛子の手を握り返そうとすると、愛子がさっと手を引き、

「私ちょっと眠るね」

と言って国彦に背を向けてしまった。

車内で三本目の煙草に火を点けたとき、ふとどこかで車の音がしたような気がした。愛子は国彦の気持を置き去りにしたまま、すっかり寝入っていた。これは天の助けなのだろうな、と思いつつも、車が止まらずに通り返り過ぎてくれればいい、とも思った。遠

くに微かに車の排気音が聞こえた。どうやら気のせいではなさそうだ。しかも近づいているようだ。国彦は愛子を起きぬようそっとドアを開けて外に出た。

相変わらず霧が深かった。音は確実に近づいているようだが、どちらから来るのかも分からなかった。外灯もない夜の峠道で、霧にくるまれていると、どこか物語の中にも落ち込んだような気持になった。車を探して辺りを見回すと、左手の奥で霧がぼんやりと光った。そして山の影がその光を削るように飲み込んでいった。と思うと、唐突に霧をかき分けるように車が現れた。

霧で視界が利かないせいか、車はゆっくりと走っていた。そして強いライトで国彦を照らし出すと、滑るように国彦の前までやってきて、静かに停止した。黒い年代物のキャディラックだった。

黒いキャディラックは霧に濡れ、つややかに光っていた。地を這うような低いエンジン音は獣の唸りに似ていた。キャディラックがエンジンをひと吹かししたとき、国彦は首筋に鳥肌がたつのが分かった。どんな人間が乗っているのかと思ったが、暗くて中は見えなかった。

そのキャディラックの窓が、静かに開き始めた。

助手席の窓が下がり男が顔を出した。もっと年配が乗っているのかと思ったが、意外にも乗っていたのは二十代後半くらいの男で、度を超えて整った顔立ちをしていた。

「この辺りで大きな猿をみかけませんでしたか」

見方によってはマネキンにも見える男はこう切り出した。目の前に白い煙を噴いている車があるというのに、事故のことには一切触れなかった。国彦は男の目を見て、奇妙な不安を覚えた。男の目は何か作り物のように見えた。国彦が不安を感じる理由はそれだけではなかった。深いところの奥底にある洞窟から聞こえてくるような、微かな囁きがこの男たちを信用するなど言っていた。国彦は昔から、ときどきではあったが、怖いくらいに勘が冴えることがあった。

「いえ、見ていませんが」

国彦は迷わずそう答えた。

ヘッドライトに照らされた生き物の姿は、間違いなく人間だった。服も着ていたし二本脚でちゃんと立っていた。だが、国彦には少しばかり人間離れした顔立ちをしている風に見えた。もっと正確に言えば猿のように見えなくもなかった。この男の表現を借りれば、大きな猿というのはぴったりの表現だ。猿ほど毛深くはなかったが。だが、この男に本当のことを言うてはいけないような気がした。それに運転席に座る、目つきの鋭い長身の男。探るようにこちらを見ている。この状況の全てが気に入らなかった。この男たちを信用するべきではない。

「そう」

助手席の男はそう応えながら、ガラス玉のような目でじっと国彦を見つめた。次のいつの間にか国彦の後に佇んでいた愛子に視線を移すと、値踏みするようを見た。そして嫌らしい笑みを浮かべながら運転席の男に何かを耳打ちをし、ドアを開けて降りようとした。

すると運転席の男が何かを言い返し、強引に男を車内に引き戻した。二人はしばらく険悪に睨みあっていた。助手席の男は険悪な顔つきながらも、明かにふざけた笑みをた

たえていた。

国彦の二人が信用できないという気持は益々強まり、早くこの二人が消えてくれないかと心から願った。絶対に関わり合うべきではない。

助手席の男は了解したのか、

「いいでしょう」

と言うと一枚の名刺を愛子に差し出した。顔には作り物めいた完璧な笑顔。

さすがの愛子もこのときばかりは笑顔を引っ込めていた。

「もし、大きな猿、そう人間くらいあるやつを見掛けたら、ここに連絡してください。謝礼を差し上げましょう。たんまりとね」

愛子が恐る恐る名刺を受け取ると助手席の男は、

「それと、もし見つけても他人には喋らないほうがいい。謝礼が減りますからね。じゃあまた、いづれ」

と言って実に嬉しそうに笑った。

二人は何事もなかったように去っていった。事故のことには最後まで触れなかった。車の去った後には運転席の男が吸っていた、いやに臭いのきつい煙草の吸い殻が煙りを上げていた。

名刺には、

株式会社 はくりゅう

と書かれていた。

車が見えなくなって二時間以上経ってから、ようやく安曇が戻ってきた。辺りはすっかり明るくなり、霧はどこかへ消えていた。車は全く通らなかった。そして二人は待ちくたびれていた。

「おい、どこまで行っていたんだよ」

「なかなかすばしっこい奴だね。それより早くここを立ち去ろう。ここは危険だ」

「何が危険だよ。何時間もほっつき歩いている」

と喉まで出かかったが、安曇の硬い表情に言葉を飲み込んだ。

「どうやって」

「煙が出るくらいだ。まだ動くだろう」

第二章以降は正式版をご購入してからお楽しみ下さい。

ホシゾラノムコウ（試し読み版）

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
